



# 呪われた刀

---

---

長良英明

---

\*

---

そうか。僕は強いんだ。

四人目の首が飛んだ。自分で思うが、凄まじい切れ味である。この日本刀があれば全ての人間を殺せる気がする。

もう少し遡って事を綴ろう。

名前も知らぬ男が、道端に血を流して倒れていた。落ち武者だ。この辺りの農民の僕は殺されないように気をつけて観察していた。しかし、彼はとっくに僕の存在に気づいていたようで、「小僧、何もしないからこっちへ来い」と今にも消えそうな声で呟いてきた。

注意しながら近寄ると、訳のわからないことを言ってきた。

「この刀は呪われている」

「は、はあ」

だとしたら、なんだというんだろう。

「この刀は持ち主の力を何倍にもしてくれる。しかしな、強くなる、ということはさらに強いものが寄ってくる、ということなんだ」

話の合点がいかない。

「殺す、ということは殺される覚悟をするということだ」

「はい」

「お前にその覚悟はあるか？」

「……」

「酷な質問だったな。もうすぐこの近辺は戦争になる。だから――」

「え？」

「これで自分の身だけでも守りなさい。家族は？」

「いません」

「そうか」

落ち武者はそう言って、青空を見て、続ける。

「戦うからには一番を目指しなさい。負けてもいい。でも、挑戦することをやめてはいけないぞ」

「……」

僕は言葉が見つからないまま刀を受け取ると、落ち武者は同時に絶命していた。

そう時も経たずして、大勢の武士たちが侵攻してきた。村は戦場となり、多くの人間が殺された。

五人目の両腕が飛んだ。

大丈夫、まだ戦える。

強くなる、ということはさらに強いものが寄ってくる、ということなんだ。

六人目だ。さっきまでは一撃で切り倒していたのに、一度、刀を刀で弾かれた。このままだと、そのうち死ぬ。

七人目。こいつは大将だ！

「なかなかいい腕だな、小僧！我が軍門に下るか？」

戦うからには一番を目指しなさい。負けてもいい。でも、挑戦することをやめてはいけません。

「――断る。とりあえずお前の首がこの辺りの一番だ」